

インターネット版

# 白夜

第5号

2021年11月

北海道スウェーデン協会

コロナ禍もようやく落ち着いてきたかと思ったら、気がつけば、2021年も残すところ一か月余りとなっていました。皆様は、いかが、お過ごしでしょうか。

さて、「白夜」第5号をお届けします。

先に発行した当協会の紙媒体による広報誌Tjena! 第4号に蒔田玲果さんのインタビュー記事を掲載したのですが、原稿作成時点では大変な長文になり、Tjena! 掲載時には内容を大幅に割愛せざるをえませんでした。そこで、本号に、その全文を掲載することにしました。

一方、現在、スウェーデンでは、ロベーン前首相が辞任し、新たにアンデション前財務相が組閣作業に当たっています。このまま首相となれば、同国初の女性首相となります(11月16日時点では、それ以上の情報は伝わってきません)。このような時期ということもあり、事務局の目黒が、もう一つの記事として、スウェーデンの政治状況についての文を書いてみました。

さて、当事務局では、自由なテーマの下で執筆いただいた会員各位の投稿をまとめて、読者の皆様にお読みいただきたいと考えています。

いつもお願いですが、会員各位におかれては、何時でも結構ですので、事務局まで原稿をお寄せいただければ幸いです。word文書(40字×40行)などで、1600~3200字程度を目安に(それより長くなっても構いません)、必要に応じて、写真も添付ください。

ある程度の原稿が集まりましたら、すぐに発行いたします。

年末の忙しい時期を迎えますが、どの皆様も、お元気で過ごしてください。

(Tjena! 第4号インタビュー全文)

## スウェーデンでの三年間

### 蒔田玲果さんインタビュー

ポートレートモデルでもある蒔田玲果さんは、この春まで、歯科医師としてストックホルムのカロリンスカ研究所に留学されていました。その貴重な体験を語っていただきましょう。



蒔田玲果さん

インタビュアー(以下「イ」) 蒔田さんがスウェーデンに行かれた目的や滞在期間などを教えてください。

蒔田さん(以下「玲」) スウェーデンへ渡航したのは、2018年始め頃です。私は当時、北海道大学の大学院博士課程に在籍しており、カロリンスカ研究所という医科歯科大学へ留学するためにスウェーデンへ行きました。当初は1年間の予定でしたが、結局3年以上滞在中、今年の6月に日本へ帰国しました。

カロリンスカ研究所とは少し聞き慣れない大学名かと思いますが、研究者たちの中ではとても有名な大学なんです。ノーベル生理学賞はこのカロリンスカ研究所が選出しており、日本の皆さんも一年に一度はニュースで目にしていないかもしれません。しかし、実は私、恥ずかしながら留学が決まるまでこの大学を知らなかったのです。私が海外生活に興味があるという話を聞いた国際歯科部の先生が紹介してくれたのがこの大学でした。「行

ってみたいですよ！」と威勢よく返事したのですが、この後にこの大学がその年に世界歯学部ランキングで一位になった大学だということを知り、かなり尻込んでしまいました。笑

イ 実際、カロリンスカ研究所に留学されてみていかがでしたか？

玲 まずは、17時以降に残っていたら早く帰らなさいと上司に言われたことに驚きました。毎日夜中まで一生懸命仕事をしないとみんなについていけないと思っていたのですが、17時を過ぎると、研究所はガラガラ。長く仕事をするより、効率よく仕事をしてワークライフバランスを保てる人の方が評価される国でした。日本人がたくさん残業するらしいということはスウェーデンでも有名なようで、「君は日本人だけどここでは上司が帰るのを待たなくていいんだよ。」と言われてしまいました。

研究所ではとても刺激的な日々を送ることが出来ました。毎日のようにランチタイム研究発表会があり、研究所内の研究者が発表していたり、世界的に有名な研究者が招待されて発表したりしていました。発表会の参加者には大学からランチが提供されるので、毎回たくさんの方が参加し、貴重な研究発表・討論の時間になっています。ノーベル受賞者の講演も多々あり、iPS細胞の山中伸弥先生とも交流させてもらう貴重な機会もありました。

カロリンスカ研究所が特別な場所である一つの理由として、人間に対して行う実験がしやすい環境にあることがあると思います。スウェーデンは動物愛護の国で、動物を使った実験はとても厳しく制限されています。でも逆に、人間は自分で参加するかしないかを決められるためか、人間を使った実験は日本よりもずっと簡単に始められます。私もその制度を使い、日本ではなかなか実現することが難しい実験をいくつかさせていただきました。

イ スウェーデンで生活されてのご感想はいかがですか。

玲 スtockホルムはどこを歩いても美しく、夜はバーやレストランの明かりがおしゃれでとても素敵なおとこでした。しかし、一人で留学、しかも学生ではなく研究者としての滞在だったため、最初は全く友達が出来ず、「いつになったらこんな素敵なバーに友達と来られるのかなあ。」なんてセンチメンタルな気持ちで研究所からの帰りのバスから外を眺めていました。スーパーでの買い物も一苦労。全てがスウェーデン語で、グーグル翻訳でも翻訳されないものがたくさん！あらゆる種類の牛乳らしきものがずらーっと並んでいる棚の前で立ち尽くし、牛乳とヨーグルトを選ぶのに三十分以上かかっていた。それから3年、いまでは親友と呼べる友達が何人もいて、まさかのスウェーデン人の彼と結婚して家族までできてしまいました！お気に入りのヨーグルトもすぐに選べるようになりました。

夫と出会ってからはさらに世界が広がりました。夫はダーラナ出身で、音楽家。一年の半分はダーラナで過ごすようになったのでダーラナのことにとっても詳しくなり、森でベリーやキノコを採る楽しさも知りました。

レクサンドで二年に一度行われている日本映画祭ではMegane Bandという夫が所属するグループが参加することになり、そこでゲストシンガーとして日本の曲を数曲歌わせてもらいました。このグループ、私が参加したと聞くとただのアマチュアグループのように聞こえてしまいましたが、私以外のメンバーはみんなスウェーデンや日本で大活躍しているプロの音楽家集団だったので、わたしにとっては夢のような経験でした。

最近のスウェーデンでは是枝監督の作品が映画やテレビで放送されていたり、竹内まりやの曲が急に人気になったりしていて、従来から人気だった漫画やアニメだけではなく日

本の映画や音楽を好きな人が増えてきたように感じます。また夫はカメラマンでもあるので、モデルの経験を活かして二人でフォトグラファーDuo としても活動し、ミュージシャンのアルバム表紙の撮影やプロフィールの撮影の仕事をして、クリエイティブなことをする楽しさを再認識しました。



結婚されたビョーンさんとともに

イ オフの時間に行ったところで、ストックホルム近郊のお気に入りの場所があったら、教えてください。

玲 セーデルマルム島です。

ガムラスタンの南にある島で、この島に二年間住んでいました。魔女の宅急便のモデルとなった街の一つであるガムラスタンやシティホールを上から見渡せる公園があったり、おしゃれなセカンドハンドやアンティークのお店があったり、カヌーをレンタルして運河からストックホルムの景色を楽しんだりできるのです。

イ スウェーデンは、歯科技術では世界最先進の国の一つと聞きましたが、少し説明していただけますか。

玲 スウェーデンが歯科先進国と言われる要因のひとつに、予防歯科大国であることがあげられます。スウェーデンでは24歳の誕生日を迎えるまでは歯科検診や予防のための処置を含めた歯科治療が全て無料です。逆に24歳になってしまうと社会保険が適応されなくなっ

てどんな治療も全て自費になり、治療費がとっても高くなってしまいます。そのため、大人になったときに困らないよう、みんな子供の時から歯の健康に気を配り定期検診や予防処置をこまめに行っています。24歳以降は1年に1度、国から歯科クーポンが発行され、定期検診や歯のクリーニングなどに使用することが出来ます。このような制度のおかげで、スウェーデンは予防歯科大国となったのです。また、歯磨きの方法も日本とは少し違います。フッ素が入った歯磨き粉を2センチたっぷり使って歯を磨き、最後はうがいをせず口の中の歯磨き粉と唾を軽く吐き出すだけです。この方法によって、フッ素が多く口の中に残って、虫歯になりにくくなります。

イ これからの目標をお聞かせください。

玲 スウェーデンで見て学んできたことを活かして、歯の大切さを日本の皆さんにもっと知ってもらいたい活動をしたいです。日本の保険制度をスウェーデンのように変えることは私には出来ませんが、心と体の健康のために、歯の健康がとても大切だということを知ってもらいたいのです。

また、スウェーデンが大好きになったので、スウェーデンの素晴らしさを紹介していきたいです。今は夫と一緒にInstagramやYouTubeで少しずつ発信し始めています。もしよかったら下記のQRコードから見てみてくださいね！



## スウェーデンの政治情勢を考える

目黒聖直

今日の欧州民主国家における各政治勢力は以下のように形成されてきた。

すなわち、18世紀、議院内閣制が世界で最初に始まったイギリスには、保守勢力（トリー党）と自由主義勢力（ホイッグ党）が現れた。後の保守党と自由党であるが、この頃は制限選挙の時代であり、これらは貴族やブルジョア階級の間での勢力争いだったから、労働者には選挙権も、彼らの代表者を出す権利もなかった。

それは、他の欧州諸国でも同様であったが、19世紀から20世紀初頭にかけて、各国で労働者たちが参政権を獲得する。そして、このころ、自由主義者の中でも特にリベラルな勢力が労働者たちと結びついて（今日、ときに「リベラル」を「左翼」と同義に解する風潮があるのは、ここに起因するのだろう）、彼らの権利を擁護する社民主義政党が誕生したのである。その勢力拡大と並行して、従来の自由主義政党は勢いを失い、たとえば、今日でも英国、ドイツ、スウェーデンいずれにも自由党とか自由民主党とかいった政党があるものの、保守と社民主義の二大政党の狭間にあって大きな勢力とはなっていない。

政界において、保守政党と社民主義政党との二大勢力が対抗するようになったのは、もちろん、世界大恐慌を背景とするケインズ経済学の誕生や戦後の「ゆりかごから墓場まで」と言われた福祉国家の考え方の登場という事情も大きい。すなわち、どちらも、政府による財政支出を重視する考え方であり、そのための大きな政府という国家観に結びつく。英国の労働党、フランスの社会党、ドイツやスウェーデンの社民党等が目指した方向である。

ところが、1970年代のオイルショックに端を発するスタグフレーションに対応できなかった

とされて、ケインズ経済学は激しい批判に晒され、これに代わって出てきたのが、ハイエクやフリードマン率いるシカゴ学派等の新自由主義的な経済観である。国家の関与を取り除いて、規制緩和や減税で経済活動に活力を与えようとする政策は、1979年に就任したサッチャー英首相や80年に当選したレーガン大統領に代表される。サッチャーは保守党であるが、新自由主義的政策をとり、それゆえに国家が提供する福祉が手薄になると、保守的な伝統回帰というべきか、ビクトリア朝的な価値観や伝統を唱えて自助努力を促したのである。

大陸側ヨーロッパ諸国の保守政党は流石にそこまで極端ではなかったが、スウェーデンにしても、中道・右翼ブロックの中心である保守政党の穏健党は、長く新自由主義的改革を主張してきた。

このように、戦後の欧州においては、次の2つの勢力がしのぎを削ってきたと言える。

- 保守勢力 ~ 福祉や所得再配分を軽視
  - いわゆる小さな政府を標ぼう
- 社民勢力 ~ 福祉や所得再配分を重視
  - いわゆる大きな政府を標ぼう

ところが、本来は労働者の味方であったはずの左翼政党は、今日においては、環境問題やLGBTQの権利擁護など普遍的価値を具現化することを目的とする政党に変貌してきたとする指摘がある（「労働者の味方をやめた世界の左派政党」（吉松崇 PHP 新書））。労働者階級の子弟も高等教育を受けるようになり、その中から政治家になる新たなエリートたちは、労働者の価値よりも普遍的な価値を重んずるようになったというのである。確かに、第三の道を唱えたブレア、クリントン、そして今日のマクロンといった政治家たちは、左寄りの政党に属しながら、経済政策としてやった（やっている）ことは新自由主義に近い。欧州ではないが1980年代のニュージーランド労働党も、新自由主義的改革を進めたことで知られる。だが、そこに労

働者の利益を守ろうとする姿勢は見えなかった。この頃の政治的考え方を筆者なりに分類すると、図1のようになる。

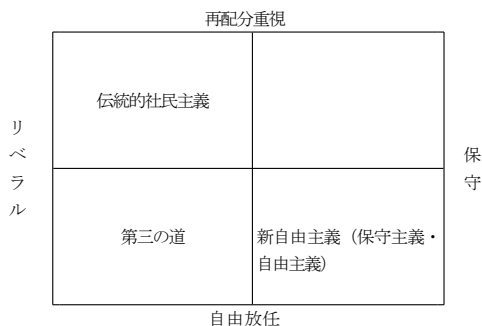


図1 移民問題噴出前の政治的相関図

そうしている間に、もう一つの対立軸が明確になってきた。難民・移民に対する態度だ。こうした人たちの排斥を訴えるのが極右政党というわけだが、彼らが国境の壁を高くすることを主張する結果、自国民に対しては保護や福祉の充実がもたらされると説いているようにも見える（フランスの国民連合やスウェーデン民主党等）。その意味では、トランプの姿勢もこれに近かったのかもしれない。その結果、労働者の不満を掬い取ったのだ。

政治勢力は、図2のように変化していったと言っていだろう。ちなみに、保守政党というのは、意外と環境保護に熱心だという。なにごととも古いものを守る、ということであろうか。

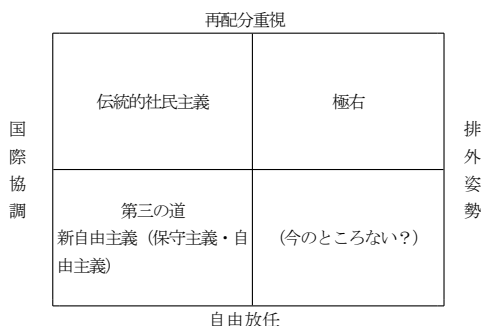


図2 移民問題噴出後（現在）の政治的相関図

さて、スウェーデンである。ここも長く、社民党（正式には、社会民主労働党）と保守の穏健党が第一、第二勢力を占めてきたが、前回2018年の選挙では極右のスウェーデン民主党が第三党となり、社民党と穏健党のどちらも、友党と組んでさえ過半数を確保できない事態に陥ってしまった。人口当たりの難民受け入れ人数がハンガリーとともに最も多いという中で問題も発生し、彼らの排斥を訴えるスウェーデン民主党が大きく支持を伸ばしたのである。穏健党の一部には、スウェーデン民主党との連立を容認する声もあったようだが、自由党や中央党などこれまで穏健党と組んできた中道政党が反対した。当然であろう。

ここで注意したいのは、2006年から14年にかけて、穏健党や自由党による中道・右派連立政権が成立したのだが、このとき、この政権は福祉国家観を否定しなかったということである。穏健党はそれまでの新自由主義路線と決別し、自らを社民党に代わる新しい労働者の党とさえ名乗ったという。したがって、現在、この国では、国際的な常識としての保守政党と社民主義政党の対立というのは存在しない。

筆者は、世界の政治学者や社会学者から「最も上手く国家運営している国はどこか」というアンケートを取れば、相当高い確率でスウェーデンとの回答が一番になると予測する（「北欧諸国」という回答もありうるが、一つの国で代表させると、結局、スウェーデンになる）。世界の国の幸福感や生活の充実度に関する様々な指標で、北欧各国が上位を独占することを見れば、そう考えてもおかしいことはないだろう。その秘密は、社民主義なのである。それは当然である。社民主義政党とは労働者のための政党である。そして、どんな国でも一番数が多いのは労働者である。しからば、労働者のための政策を進める政党が長く政権にあれば、最も多くの国民が幸せになれる。そして、スウェーデンでは、1932年以降、17年間を除いて、一貫して社民党が政権を担っている。

ただし、それは労働者独裁的な話とは違う。

ノーベル経済学賞受賞者にして社民党政権の大臣も務めたグンナール・ミュルダールを始めとする多くの経済学者が政策を構想して、合理的な判断のもと、政策の実現を図ってきたのである。20年以上も前だが、社民党事務局の職員が筆者に胸を張って言ったものである。

「我が社民党は、漸進的に、現実的な政策を遂行することで長期にわたって国民の支持を受けて、政権を担ってきた。それが、極端な国有化政策などが原因で長続きしなかった英国の労働党などとの大きな違いである。」

余談だが、今日の日本社会の混迷は、我が国に明確な社民主義政党がないことも大きな要因の一つとなっていると筆者は考える。我が国において社民主義政党が政権を取るべきかは別にして、政策論争の対立軸として社民主義的政策を訴えていくことは非常に意味のあることであるはずである。しかるに、解党した民主党にしても、確かに労働組合の支援は受けていたかもしれないが、なにか明確な労働者のための主張があったかという点、筆者には記憶がない。社民主義というはっきりとした思想が見えないのである。結局、同党は、山口二郎や井手英策といったリベラルな学者たちの失望しか残さなかった。

スウェーデンの話に戻ると、社民党では、住宅政策を巡る混乱に端を発してロベーン首相が党首を辞任し、この11月に至って、後任にマグダレナ・アンデション財務相を選出した。

彼女は、ストックホルム商科大学を卒業したあと、ウィーンやアメリカのハーバード大学でも学び、その後、政治家になったと伝えられる。社民党には、アカデミックなバックグラウンドを持つ政治家と労働組合運動などを通じて現場で実力を磨いた政治家がいるが、アンデション新党首は前者の政治家ということになる。

11月15日現在、同新党首が組閣作業を行っており、その後、スウェーデン初の女性首相に

なる見込みだが、上述のように国会の政党間の議席割合が複雑な状況なので、一転して解散総選挙となる可能性も残っているようだ。

いずれにしても、福祉国家のモデルを体現する国として、また、2018年にカーボンニュートラル宣言を世界で最初に法制化することに見られるような環境政策の世界的リーダーとして、同国内のみならず、世界にとっても、今後が注目される。

筆者は、政治学者ではないので、細かな点で事実の把握に誤解があるかもしれないが、その点をご容赦願いたい。

インターネット版 白夜 第5号終わり